





これはうれしいことですが、私が小学校5年生のときに家を新築しました。しかし、その支払いもあり、お金のことで父と母がよくけんかをしていたのを覚えています。それがとてもいやでした。そのこともあり経済的にそんなに裕福ではないことは私にも理解でき、高校受験のときも絶対公立高校に合格しなければと思っていました。なんとか公立高校には合格し、その後教師になりたいという思いから大学に進学します。大学に合格してアパート暮らしを始めるわけですが、とてもうれしかったことを覚えています。大学に合格したこともそうですが、家を離れて一人暮らしができるということもうれしい要因のひとつでした。

私が大学に通う間、学費はもちろんのこと、アパート代を含め生活費を毎月仕送りしてくれていました。当然感謝はしていましたが、それは当たり前のことだというぐらいにしか思っていなかった自分があります。今考えればそのために父は自分のくらしを相当犠牲にしていたはずなのですが、そこまで私の思いは及びませんでした。

無事大学を卒業し、教師生活がスタートします。父は私がはやく実家（和水町）に帰ってくることを望んでいたようですが、初任地が熊本市、次が菊池市ということもあって、結婚して住んでいた県営の武蔵ヶ丘団地（光の森のすぐそばです。）で生活を続け、結局父が亡くなるまで武蔵ヶ丘で生活をしていました。

父が食道がんに侵されていることが分かりました。発見が遅れ、放射線治療をはじめましたが食道に穴が開いていることがわかり、その治療もできなくなり、食事も水も口からとることができなくなりました。そして亡くなってしまったわけですが、父の葬儀の準備をしているときに、はじめて父の思いを知らされることとなります。

父の友人が私に言いました。「お前の親父が酒に酔うといつも言っていたことを知っているか・・・。」と話し始められました。

まだ、古い家に住んでいた頃です。私が父から、「なぜ友達をあまり家に連れてこないんだ」と聞かれたとき、私は覚えていないのですが「こんなぼろ家に連れてこられるか。」と答えたのだそうです。「お前の親父は酒に酔うといつも、あのとき『こんなぼろ家に連れてこられるか』と雄治が言うたもんなあ、と話しよらしたっぞ。」と聞かされました。私は、あふれる涙を止めることができませんでした。

父は、私のそんな一言で家を建てることを決心し、その上私に同じような苦勞をさせたくないという思いで大学まで出してくれたのだということがはじめて分かりました。そんな父の思いに、父が亡くなった後にやっと気づけたのです。私が今こうして生活できているのは間違いなく父のおかげなのです。父が元気なときに、「ありがとう。」の一言が言えなかったことが、今でもくやしくて仕方ありません。

当時私は、自分の力で自分の行きたい高校や大学に合格したとしか思っていませんでした。しかし、それは家族の大きな支えがあったからこそできたのだということにやっと気がついたのです。

私の父は中卒ですが、私は今、父の生き方を誇りに思い、尊敬しています。